「作業 作業で勉強しなかったクラス　～未曽有の学徒動員～」

賀茂高女第 22 回（昭和 20 年）卒業

大森（光野）美恵子

「わたしらぁ、昭和 16 年の太平洋戦争勃発の年に入学し、昭和 20 年の終戦の年の卒業生よ。忘りょう思うても忘れられんようねえ。」これは、私達同級生が出会った時の挨拶ことばである。

私達は、戦争さなかの生徒で、勉強らしい勉強をしないで卒業したクラスである。女学校二年（昭和 17 年）から春は麦刈りや田植え、秋は稲刈りの勤労奉仕作業が始まった。出征兵士の留守宅へ出かけたのである。昭和 18 年も麦刈り田植え、稲刈りを済めると、教室で勉強するでなく、こんどは、お米の増産を助けるための暗渠排水作業に出かけた。NTT の鉄塔のあたりであったから、今の西条上市町や西条大坪町が田んぼだった時代である。田んぼの中へ、縦に横に深さ 1 メートル以上の溝を掘り、松子山から粗朶を運び、それを溝の中へ入れ込んで暗渠にする。その粗朶の中を悪水がくぐって流され、湿田を乾田にするという作業である。西農の生徒さんと私達賀茂高女の生徒が協力して働いたものだ。粗朶を背負う「おいこ」も列車に乗せて通ったものだ。

最上級生になった四年生（昭和 19 年）は、例年の如く麦刈り田植えの勤労奉仕作業を済ませると、まもなく、学徒動員の出陣である。何事も神だのみと、西条東の諏訪の宮で磯部宮司ののりとをいただき壮行式をしたとき、昭和 19 年 6 月 30 日、私達賀茂高女の四年生は

呉市広町海軍第 11 空廠に所属した学徒動員生となった。

　そこでは、飛行機部と発動機部とに分かれ、私は発動機部第二工場の山下組へ配属された。

　現在のように冷暖房設備があるわけではなく、真夏に向って行く工場の中は、油のにおいと、部品生産をする轟音で、息がつまりそうであった。わたしだけではない、みんなそう感じたであろう。「こんなことで弱音を吐いてはお国へ申し訳ない。」と、私達は鉢巻をしめ直し、ムーッとする工場の中で油まみれになって機械へ挑戦した。

　仕事が終わると、疲れた体を軍歌に元気づけられながら、足並揃えて帰途に着くのである。工場の中は、工員さんよりも、県下の中学校や女学校から集められた動員学徒の方が多いように思えた。

　三直交代といって朝 8 時から午後 4 時まで、 4 時から夜中の 12 時まで、12 時から朝の 8 時までと、一台の機械を三人で操作していた。機械は一日中働きっぱなしである。

　昭和 20 年になって本土空襲が度重なるにつれ、私達の工場も大広の隧道工場へ疎開した。その頃であったろう、山下組長から B29 の発動機の部品を見せられた。「あっ、これでは日本は負ける！」私達動員学徒の胸は痛んだ。部品の形こそ同じようであるのに、材質が大違い。我々が「特攻部品」「特攻部品」と急がされ研磨している部品の材質は、泥から引き上げたような鉄。それに比べ B29 のものは、ステンレスのように美しい光沢があり、いかにも頑丈そうな材質であった。

それから間もなくのこと。夜の仕事を終え、朝眠りについた頃空襲警報で起され、眼をこすりこすり防空壕へ待避した。頭上が攻撃されてきたようである。パチパチドーン シューシュードーン。遂に耳をふさいで眼を閉じた。防空壕の中は静まりかえった。向こうの隅ですすり泣く声がする。県外から来た挺身隊の姉さんであった。遠く親元を離れた淋しさが募ってきたのであろう。私達学徒は、歯をくいしばって怖さをこらえた。

グラマンが立ち去ると、私達の弥生の寮一中隊は、焼夷弾の攻撃を受け、無惨な姿に変っていた。一中隊はちょうど仕事中で留守であった。それは忘れもしない、昭和 20 年 3 月 19 日。県下で初めて攻撃を受けた日であるから。

それからというものは、仕事着を身につけ、防空頭巾を被り、靴を履いたまま寝るようになった。

それ以後、広海軍工廠や第 11 空廠めがけての空襲はしばしばであった。グラマンの編隊が仁方の山頂から急降下し、 爆弾を投下しては南の海へ消えた。こんなくやしい光景が大広隧道工場からありありと見えた。黒瀬川の砂浜にも爆弾の炸裂したすさまじい穴が残されていた。

こんな戦争私達だけで結構です。学徒動員なんてもってのほかです。恒久平和な日本を望んでいます。